

# 神

(第2章 第5章)

## 第二章 神について、また聖なる三位一体について

### 1節 神の定義（神自身に即して対自的な定義）

1 - 神の存在は、唯一（ただ一人）である。（一神教の宣言）

「聞け、イスラエルよ。われらの神、主は唯一の主である。」 共

申命記6・4

「世の偶像の神は実際にはないものであること、また、唯一の神以外には神は存在しないことを知っています。……私たちには、父なる唯一の神がおられるだけで、すべてのものはこの神から出ており、私たちもこの神のために存在しているのです。また、唯一の主なるイエス・キリストがおられるだけで、すべてのものはこの主によって存在し、私たちもこの主によって存在するのです。」 改

コリント人への手紙 第一8・4,6

1 - 神は、生ける、まことの神として存在されるだけである。

「わたしたちがあなたがたのところでどのように迎えられたか、また、あなたがたがどのように偶像から離れて神に立ち帰り、生けるまことの神に仕えるようになったか、」 共

テサロニケ信徒への手紙 ー 1・9

「しかし、主はまことの神、  
生ける神、とこしえの主。  
その怒りに地は震え、  
その憤りに国々は耐えられない。」 改

エレミヤ書 10・10

「とりわけ聖書の神は、われわれやわれわれの世界が存在するような意味でこの宇宙にある一つの客体でないから、科学的方法によって把握されることはない。……われわれは神の存在を証明しようとする試みを聖書の中に見出すことは決してない。神に近づこうとする人々に求められる第一のことは、『神が存在しておられることを信じる』（ヘブライ 11・6）ことである。」

《註解》

神についての正しい認識は、神をあがめる目的で、神を知るところに成立するとカルヴァンは言っている。

「神への敬いも恐れもないところでは、本来の意味で神を認識するとは言えない。……我々の精神は、神に何らかの礼拝を捧げていなければ神を理解できない。」(綱要) 1 - 2 - 1

カルヴィニズムの根本モチーフは、思想と生活のすべての中心に「ただ一

人の、生ける、まことの神」を置くことである。《註解》

1 - 神は、存在と完全さにおいて無限である。

「あなたは神の深さを見抜くことができようか。

全能者の極限を見つけることができようか。

それは天よりも高い。あなたに何ができようか。

それはよみよりも深い。あなたが何を知りえよう。

それを計れば、地よりも長く、海よりも広い。」 改

ヨブ記 12・7 - 9

「だが、これらは神のほんの一端。

神についてわたしたちの聞きえることは

なんと僅かなことか

その雷鳴の力強さを誰が悟りえよう。」 共

ヨブ記 26・14

1 - 4 神は、最も純粋な霊である。

「神は霊である。だから、神を礼拝するものは、霊と真理をもって礼拝しなければならぬ。」 共

ヨハネによる福音書 4・24

カルヴァンは、神の本質が無限であり、靈的であることを次のように説いている。

「神の本質が無限であり、靈的であると聖書は説いている・・・・・・神は我々に慎ましさを守らせようとして、御自身の本質について残りなく示すことはされなかったのであるが、上に挙げた[無限であり、靈的であるという]特性を表わす二つの言葉によって一切の粗野な空想を除き去り、人間精神の凶太い無謀を抑制される。すなわち、その本質の無限であることは我々を恐れさせ、自らの感覚によって神を計ることができないようにされていることは確かである。またその本性が靈的であること、我々が神を地上的ないし肉的なものと思弁するのを許さない。神はしばしばその住みかが天にあると示したもうのは、この理由による。すなわち、神は理解を絶した在り方によって地上に満ちておられるが、我々の精神が愚鈍さの故に地面に這いつくばっているのを見、その怠慢と無為を追い払うために、この世を越えた所へと我々を高めたもうのは当然である。」(綱要)1 - 13 - 1

さらに、《註解》では、神の無限性について次のように言う。

「( 神の無限性 )は、神はいかなる制限も受けないが、われわれは対照的に、多くの面で制限されていることを意味する。なんと言ってもまず、われわれは、いかなる一瞬にもわれわれが占める空間においてだけでなく、われわれの人生の長さにおいても、制限されている。しかしながら神は、かかる限界を知りたまわない。」《註解》

## 1 - 5 神は、見ることはできない。

「永遠の王、不滅で目に見えない唯一の神に、誉れと栄光が世々限りなくあ

りますように、アーメン。」 共

テモテへの手紙 — 1・17

### 1 - 6 神は、身体やその部分をもっていない。

「あなたがたは十分に気をつけなさい。主がホレブで火の中からあなたがたに話しかけられた日に、あなたがたは何の姿も見なかったからである。墮落して、自分たちのために、どんな形の彫像をも造らないようにしなさい。男の形も女の形も。」 改

申命記 4・15、16

「神は霊である。」 共

ヨハネによる福音書 4・24

### 1 - 7 神は、情念をもたない。

「群集はパウロの行ったことを見て声を張り上げ、リカオニアの方言で『神々が人間の姿をとって、わたしたちのところにお降りになった』と言った。……(パウロとバルナバは)言った。『皆さん、なぜ、こんなことをするのですか。わたしたちも、あなたがたと同じ人間にすぎません。あなたがたが、このような偶像を離れて、生ける神に立ち帰るように、わたしたちは福音を告げ知らせているのです。この神こそ、天と地と海と、そしてその中にあるすべてのものを造られた方です。』」 共

霊について、岡田稔先生の《解説》が、分かりやすい。

「霊とは、不可見で部分から成り立たない単一性を特質とする存在者であって、物質と異なるとともに人間性とも異なるものである。人間の魂は一種の霊であるが、それが身体と結合しているとき、純粹・至純の霊ではない。この純粹性・至純性は、罪に汚れた霊に対する聖という意味ではなく、不見性と部分を持たないこと、情念を持たないことで、純粹に靈性を保持しているという意味で『まじり気のない霊』という意味である。」《解説》

#### 1 - 8 神は、不変である。

「よい贈り物、完全な贈り物はみな、上から、光の源である御父から来るのです。御父には、移り変わりも、天体の動きにつれて生じる陰もありません。」

共

ヤコブの手紙 1・17

「主であるわたしは変わることがない。」 改

マラキ書 3・6

「神の永遠の存在と密接に結びついているのは、神が『不変』、すなわち変化しない、という真理である。人間としてわれわれは、肉体的に多くの面で変化するが、また、考え方や、恐らく、態度、規準、価値観においても変化する。しかし、神は、このような変化に服さない（詩編 102・27 - 28、ヤコ

ブ 1・17)。それは、過去において御自分の民のためにかくも大いなることを数々なしてこられ、かくも大いなる、さまざまな約束を与えてこられた神は、われわれの父祖たちが昔神により頼んだように、今われわれが依り頼むことができるお方である、ということの意味する。」《註解》

### 1 - 9 神は、無限に広大、つまりどこにでもおられる(遍在)。

「神は果たして地上にお住まいになるでしょうか。天も天の天もあなたをお納めすることはできません。わたしが建てたこの神殿など、なおふさわしくありません。」 共

列王記上 8・27

「わたしは近くにいれば、神なのか。

主の御告げ

遠くにいれば、神ではないのか。

人が隠れたところに身を隠したら、

わたしは彼を見ることができないのか。

主の御告げ

天にも地にも、わたしは満ちているではないか。」 改

エレミヤ書 23・23、24

「神は、知識、知恵、正義、力、等々といった、彼のもろもろの完全性において無限である。ある程度だが、神の無限性は、神は『無限に広大』である、ということにより、更に説明されている。その語の意味は、神は御自身

の被造物が持つ空間的制限に服せず、それを越えているということである。  
ときどき用いられるほぼ同義の語は、偏在である。」《註解》

## 1 - 10 神は、永遠である。

「山々が生まれる前から、  
あなたが地と世界を生み出す前から、  
まことに、とこしえからとこしえまで、  
あなたは神です。」 改

詩篇 90・2

「永遠の王、不滅で目に見えない唯一の神に、誉れと栄光が世々限りなくあり  
ますように、アーメン。」 共

テモテへの手紙 — 1・17

「神は、時間と空間に制限されず、それを越えて存在される。だから永遠である。人間は肉体と精神（考え方、態度、価値観等）において変化するが、神は不変である。神は時間と空間の四次元世界も支配されている。時間と空間はビッグバンによって宇宙が誕生したときにはじめて生まれた。自然科学の世界では、時間と空間は密接に関係しあっていることが、アインシュタインの相対性理論によって証明された。また、量子物理学の世界では、「本質的偶然」が存在することが証明されている。神を信じる立場では、「本質的偶然」を神の意志と理解する。」(小林融弘「世界はどのようにしてできたか」より)



## 1 - 11 神は、人間によって理解しつくしことのできない存在である。

「大いなる主、限りなく賛美される主

大きな御業は究めることもできません。」 共

詩編 145・3

神の不可把握性について《解説》より。

「改革派教会は、神の不可把握性を強調する。これは一方、合理主義に対する否定的主張であるとともに、不可知論、すなわち、神秘主義のいう神知識の否定とは異なる主張である。わたしたちは、神は知ることのできる神、いな、知らなければならない神である、と主張する。もちろんそれは、神が自己をわたしたちに啓示されることによってのみ、知ることができる。とにかく神は自啓者であって、人間に自己を知らしめる神である。

同時に、わたしたちは神の全貌を、一時にすっかり知ることのできる立場に置かれていない。わたしたちの神知識は常に部分的で、また、不徹底である。神が知らせてくださる程度においてのみ知ることができるのである。この神知識の不完全性は、実に神の自己認識の完全性と表裏をなしている。神は神を完全に知っておられる。」《解説》

## 1 - 12 神は、全能である。

「アブラムが九十九歳になったとき、主はアブラムに現れて言われた。

『わたしは全能の神である。あなたはわたしに従って歩み、全き者となりなさい。』」 共

創世記 17・1

「彼らは、昼も夜も絶え間なく言い続けた。

『聖なるかな、聖なるかな、聖なるかな、

全能者である神、主、

かっておられ、今おられ、やがて来られる方。』」 共

ヨハネの黙示録 4・8

神の全能性について《註解》より。

「( 神の ) この属性は、『全知』という付随する名詞の述語によって一層良く知られている。われわれは人間なので、やりたいと思い、なりたいと思う多くのことが、しばしば、われわれの力に余る。しかし、神は、やりたいと意思し、願うことは何でもおできになる。もちろんこれは、神が宇宙の創造者であるという事実から来ており、神の民が自分自身より大きな力に立ち向かうとき、彼らの慰めとなる(例えば、詩編 124・8)。神の御力は、神の御心のままに働くが、その御心は恣意的であり矛盾するようなものでなく、正しく、よい、真実なものである。それは、神が自己矛盾を犯すことはありえない、ということの意味する。」《註解》

1 - 13 神は、最も賢い存在である。

「知恵に富む唯一の神に、イエス・キリストによって、御栄えがとこしえまでにありますように、アーメン。」 改

《註解》による知恵の考察。

「『最も賢い』というのは、知恵とは、本当のところ、神が彼の良く、清い諸目的を達成するためにその知識を実際的に適用することだからである。知恵は、人々の間では[知識と比べて]はるかに希にしか見られないもので、知識において卓越した人々に必ず備わっている特徴というようなものでは決してない。明らかにイエスは、知恵はこの世の人々の間でよりも『光の子ら』の間で一層希だと考えておられた(ルカ 16・8)。神の知恵は聖書全体に行きわたっており、また、被造物の中にも、摂理の中にも明白である。実際のレベルでわれわれは、神が自分たちに対して持つておられる目的あるいは目標について自分が明確でない場合には、自らの人生の中に神の知恵を認めることができなくなる。例えば、われわれが、神が第一に関心を持つておられるのは、われわれの幸福ではなくわれわれの聖性である、ということが分かれば、そのとき、われわれは、自分たちのさまざまな挫折、困難、困窮、苦難、喪失を、われわれを御子の姿に似たものにしようとする(ローマ 8・29)神の究極的意図の光で見ることができるようになる。」《註解》

#### 1 - 14 神は、最も清い存在である。

「聖なる、聖なる、聖なる、万軍の主。

その栄光は全地に満つ。」 改

イザヤ書 6・3

1 - 15 神は、最も自由に振る舞われる。

「わたしたちの神は天にいまし

御旨のままにすべてを行われる。」 共

詩編 115・3

1 - 16 神は、最も絶対的な存在である。

「神はモーセに仰せられた。『わたしは、わたしはある という者である。また仰せられた。『あなたはイスラエル人にこう告げなければならない。わたしはあるという方が、私をあなたがたのところに遣わされた と。』 改

出エジプト記 3・14

わたしはある という言葉は、「神は過去に存在し、現在も存在し、未来永遠に存在する意であり、神の自存性、唯一性、永遠性を表す最も適切なことば。」《脚注》であり、また、「神の自由、威厳、神秘を強調するものであり」《ハーパー》、「犯しがたい尊厳性を持つことを示している 《略解》。

「以上 1 - から 1 - 16 までは、絶対者、絶対的存在(形而上学的属性)としての神の記述であり、1 - 17 以降は、人格(道徳的屬性)としての神の記述である。」《解説》

**1 - 17 神は、すべての事柄を御自身の不変で最も正しいみ旨の計画に従って  
行われる。**

「この方において私たちは御国を受け継ぐ者となりました。みこころによりご  
計画のままをみな行う方の目的に従って、私たちはあらかじめこのように定め  
られていたのです。」 改

エペソ人への手紙 1・11

**1 - 18 神は、すべての事柄を御自身の栄光のために行われる。**

「主はすべてのものを、ご自分の目的のために造り、  
悪者さえもわざわいの日のために造られた。」 改

箴言 16・4

「すべてのものは、神から出て、神によって保たれ、神に向っているのです。  
栄光が神に永遠にありますように、アーメン。」 共

ローマの信徒への手紙 11・36

**1 - 19 神は、最も愛に満ちておられる。**

「愛のない者に、神はわかりません。なぜなら神は愛だからです。．．．．私  
たちは、私たちに対する神の愛を知り、また信じています。神は愛です。愛の  
うちにいる者は神のうちにおり、神もその人のうちにおられます。」 改

**1 - 20 神は、恵みと憐れみ、忍耐に富み、慈しみとまことに満ち、わたしたちの不義と違反、罪を赦されるお方です。**

「主、主、憐れみ深く、恵みに富む神、忍耐強く、慈しみとまことに満ち、幾千代にも及ぶ慈しみを守り、罪と背きと過ちを赦す。」 共

出エジプト記 34・6

**1 - 21 神は、熱心に御自分を求める者たちに報いられる方です。**

「信仰がなくては、神に喜ばれることはできません。神に近づく者は、神がおられること、神を求める者には報いてくださる方であることを、信じなければならぬのです。」 改

ヘブル人への手紙 11・6

**1 - 22 神は、その裁きにおいては、最も公正で恐ろしい方である。**

「私たちの神、契約と恵みを守られる、大いなる、力強い、恐るべき神よ。アッシリヤの王たちの時代から今日まで、私たちと私たちの王たち、私たちのつかさ、祭司、預言者たち、また、私たちの先祖と、あなたの民全部にふりかかったすべての困難を、どうか今、小さい事とみなさないでください。私たちに

降りかかって来たすべての事において、あなたは正しかったのです。あなた誠実をもって行われたのに、私たちは悪を行ったのです。」 改

ネヘミヤ記 9・32,33

### 1 - 23 神は、すべての罪を憎まれる方である。

「誇り高ぶる者たちは

御目の前に立つことができません。

あなたは不法を行うすべての者を憎まれます。

あなたは偽りを言う者どもを滅ぼされます。

主は血を流す者と欺く者とを忌みきらわれます。」 改

詩篇 5・5,6

### 1 - 24 神は、咎ある者を決して無罪にしてしまわれぬお方です。

「主は熱情の神、報復を行われる方。

主は報復し、激しく怒られる。

主は敵に報復し

仇に向って怒りを抱かれる。

主は忍耐強く、その力は大きい。

主は決して罰せずにはおられない。

その道はつむじ風と嵐の中にあり

霊は御足の塵である。」 共

ナホム書 1・2,3

「幾千代にも及ぶ慈しみを守り、罪と背きと過ちを赦す。しかし罰すべき者  
罰せずにおかず、父祖の罰を、子、孫に三代、四代までも問う者」 共

出エジプト記 34・7

この節は、神とはどんな方であるかを、その存在と属性で説明している。神はその存在において、絶対的であつ人格的である。絶対的存在としては、形而上学的属性、すなわち、無限、永遠、自立、自存、自己充足、不変、偏在等をもたれる。人格的存在としては、道德的属性、すなわち、知恵、力、聖、義、真実、愛などをもたれる。「すなわち、神は絶対的人格、人格的絶対者であられる。絶対という点は、神の自由、自己の意思決定のみによって行為し、他のどのような指図も強制も感化も援助も受けられないこと、人格という点では、厳正公正な審判者ということにおいて代表される。」 《解説》